

Os Lusíadas (解説と翻訳)

小林 英夫・池上 岑人・松尾多希子

1 はじめに

われわれは昨秋からこのポルトガル古典を読み始めている。われわれの知るかぎり、名のみ聞えてかつて部分訳なりと世に現われたことのないこの大叙事詩は、巨峯にも似て伏り崩すことは並大抵の業ではない。われわれはただ仰いで溜め息をついているというのが実相であろう。われわれの意図は何はともあれ語学的に解釈することである。その段階としての訳文をここに公けにする。ひとえに諸賢の叱正の機会をえたいためにほかならない。いちおう分担をきめ、小林が本文の訳出を、池上が詩人の伝記と原典の由来を、松尾が本編の価値と意義の解明を受け持ったが、本文解釈は三者の常住協力の結果である。

なお注はポルトガルの歴史や文学についてはなるべく詳細を期し、その調査には主として松尾があたった。

2 Os Lusíadas の価値と意義

ルネッサンス期にヨーロッパで作られた数多くの叙事詩の中で、古典形式に近代のテーマを盛った最初の重要な叙事詩が、ポルトガルの詩人 Camões の Os Lusíadas であった。

北アフリカの戦鬪で片目を失い、ゴア、マカオ、モサンビクに一官吏として滞在、数々の辛苦をなめ、当時のヨーロッパ人としては類いまれな波瀾に富んだ生涯を送った Camões は、Os Lusíadas において Vasco da Gama のインドへの航海を中心テーマに、建国から作者在世当時までのポルトガルの歴史をうたいあげた。

古代ギリシャ・ラテンの文学の伝統が復活したルネッサンスの叙事詩は、ホメロスとラテンの叙事詩の影響を圧倒的にうけ、とくにウェルギリウス (Virgilio) の“アエネアスの歌 (Aeneada)” が叙事詩の典型と考えられた。しかしながら、人間精神は抽象的になり、社会は功利的になり、もはや戦鬪的英雄や、叙事詩の特質である古代の神々に人々がそれほどの感動をもよおさなくなって来たときに、古典を踏襲した叙事詩を書くことは、詩才にたいする一つの挑戦でもあり、不可能に近いともいえた。じじつ、叙事詩のジャンルは、XII世紀からしだいに形をかえ、個人の英雄や神の血湧き肉躍るような荒唐無稽な行為を物語るものから、騎士物語を経て、卑近な市民生活に取材したコントやロマンなどにその席を譲っていった。

叙事詩は詩法によって規定された独特の規則をもち、Homeros や Virgilio の詩法に従って古典的英雄叙事詩を再興しようとしたルネッサンスの多くの叙事詩は、したがって、そのほとんどが失敗に終り、後世に残ったものは、Boiardo の “Orlando

Innamorato”, Ariosto の “Orlando Furioso” のように恋と冒険を扱った騎士道叙事詩や、キリスト教叙事詩などごくわずかである。

Camões が、ルネッサンスの詩人が一様に担っていたこの困難を乗り越えて解決しようとしたのは、まさにホメロスの詩法に則って古典英雄叙事詩を復活させるというこの問題であった。

Camões がテーマとして取りあげた Gama の航海には、叙事詩に必要な複雑な人間同志の葛藤や強烈な魅力にあふれた人物に欠けていた。それゆえ、英雄叙事詩にふさわしいダイナミックな変化と統一性を与えるために、Camões は、誠実に王命を守るだけの劇性に乏しい歴史上の人物と対照的に、愛し、憎しみ、奸策をろうし、もつれ合う生々しい情熱的な神々を配した。古代英雄叙事詩における神々は、詩中の英雄達と同じ次元で空想的であるが、Os Lusíadas では、史実に従って、しかも実際に生き、死んでから幾程も経っていない人達を描いたがゆえに、かれらの行為や人格に幻想性や想像性がなかったため、その分だけ余計にドラマチックな役割を神々に負わせることになった。

Virgilio が、Aeneas をして、カルタゴ女王 Dido にトロイア落城の日の悲惨な模様を語らせたように、Camões は、航海の途中で、Gama とその仲間ポルトガルの歴史を述べさせている。ポルトガル史の中に、空想的なロマンチックなエピソードとして、英国に渡ったポルトガルの 12 騎士と、Inês de Castro の恋と死を織りこんで、古代英雄叙事詩とはまったく別の騎士道叙事詩の要素を Os Lusíadas の中にとり入れた。このほか、かれのまったくの創造の産物である幻想的な怪物 Adamastor や “Ilha dos Amores” の話は、Ariosto や Boiardo のテーマと同じであるといえよう。Camões は、これらのエピソードを挿入することにより、詩にロマネスクな色合をつけ、古典詩のテーマと騎士道叙事詩のテーマとを融合させることに成功した。

しかし、Os Lusíadas が、Ariosto や Homeros, さらに Virgilio にまさるところは、このような幻想的個所と神話以外の部分の写實的記述にあった。荒唐無稽な英雄的行為や、信じがたい騎士道恋愛作法に代って、未知の海をこえ二つの大陸を結びつけた人々やその事績を、記録された歴史書や、実際に自らが経験したことに基づいて語ったところに、Os Lusíadas の近代性がある。Camões は、事実こそ虚構と同じように、否それにもまして興味があると信じ、そのような意図をもって作詩した。単に人物について写實的であったばかりでなく、かれはまた、自然の事物にたいしても具体的であった。アフリカやアジアのいろいろな地方の気候、風土、習慣や、人々の知らない様々な自然現象を、植物の形や、海の色や、嵐の模様や、航海中の病気についてまで、印象的な筆致で、正確かつ緻細に描き出し、当時まだ信じられていた-ptolemaeus の体系にこそ従っていたが、宇宙の全体的概念を明らかにして見せた。こゝには豊かなポルトガル・ルネッサンスの片鱗をうかがわせる科学精神と “世界” にたいするルネッサンス人の飽くことなき探求心と、近代国家のみがもつ人間観とが看取される。Os Lusíadas が、単にポルトガル国民文学のわくからだけでなく、世界的に見てもその価値を高く評価されるのは、まさにこのことにある。

“世界” に注意を向け、これを観察し写しとるという態度については、Os Lusíadas は、XVI 世紀ポルトガル写実文学の極致であり、海外発展文学の綜合である。

XIV 世紀末、イタリアにはじまった人文主義とルネッサンスの波は全ヨーロッパにひたひたと押しよせ、人々の関心の的を神より人間そのものへ、天より地へと引き下ろした。人々

は、哲学や文学の研究にみちびかれて、人性の内面に目を注ぎ、古代精神の復活から、世界と人間を発見し、人間の能力や善意への信頼と肯定を生んだ。しかし、これらの運動は、単に古典とヨーロッパの経験のわく内で行われていたにすぎなかった。人間の喜びを高揚した Rabelais の知識は、古典への深い造詣と、自然科学者としての好奇心とによって培われたに過ぎない。したがって、古典へと求めた新しいテーマが一度枯渇するや、文学や芸術は、芸術のための芸術になりはて、gongorismo や marinismo へと発展してゆかざるをえなかった。

しかしながら、ヨーロッパの西端の小国ポルトガルは、このギリシャ・ローマ精神を受けついで人文主義とルネッサンスを、地中海とスペインを通じて受け入れる一方、西の大洋からの人心を誘いかける力強いダイナミックな呼びかけに応じていた。フランスやスペインほどに高い文化をもってはいなかったが、文学や芸術における劣性を科学の進歩が補い、物質生活を改新し、実際に未知の海へ乗り出し、世界と人間の発見を体験していた。

ポルトガル文学に写実的なルネッサンスの叙事詩が生れたのは突然ではなかった。Os Lusíadas に現われる、陳腐な見なれた世界に突然開かれた新しい世界を前にした時の驚愕、讃嘆、感激は、XV 世紀の歴史家 Azurara の Crónica と、Manuel I 世にブラジル発見の詳細を書き送った Vaz de Caminha の Cartas とに共通のものであり、Camões の Os Lusíadas は、Fernão Lopes de Castanheda や、João de Barros の Décadas などのポルトガル海外発展文学の流れの総合なのである。

題名の示すとおり、Os Lusíadas の真の中心テーマはポルトガル国民の歴史であるが、こゝでは、ポルトガルの歴史は血塗れた戦いだけに集約され、同じルネッサンスの詩人 Sá de Miranda があれほどに愛した農業王たちへの讃歌は 1 行たりとも見られない。商業や農業をさげすみ、航海や戦争における武勲をとくに重んじるという、Camões を含めた当時のポルトガルの貴族階級の人生態度を Os Lusíadas はよく物語っている。

さらに注目しなくては、この貴族的武士的感情に観念的な個人主義が結びついていることである。例えば中世ポルトガル史上最大の事件であった 1383 ~ 1385 年の国家危機の叙述の個所では、実際にはこのとき一番大きな役割を演じたはずの一般民衆 (povos do reino) の行為はぜんぜん描かれず、王や高位の貴族の働きだけが国家を救ったことになっている。つまり、Camões にとっては、ポルトガル人のすばらしい勇気 (peito ilustre lusitano) とは、由緒正しい王族や貴族のそれに他ならなかった。以上述べた Camões の価値観は、XV 世紀後半のポルトガルの支配的メンタリティーの重要な特質であった。

他方、ルネッサンスの人文主義者によって発揚された愛国的感情は、Os Lusíadas では、人間の力の讃歌と結びつき、ポルトガル人発見者の大胆さにたいする神々の反応として、パッコスをして、人間はどんどん進歩を遂げ神となり、われわれが人間になる

(Os homens venham a deuses ser, e nós humanos) のではないかと心配させている。ルネッサンス精神のエッセンスであるこの人間への限らない信頼感と、それに附随する楽天主義にたいして、レステロの老人 (velho do Restelo) の悲観的予言が影をなげかける。Os Lusíadas は、海外発展を高揚したが、海外発展は、ポルトガルでは支配層のために、絶対王制のもとに育まれ、拡大されたものであって、けっしてオランダのように、ブルジョアジーの力の成長の所産ではなかった。そして、

Camões も、海外発展に、政治的、宗教的、科学的意義は見たが、社会的意義だけは認めなかった。Os Lusíadas の内的緊張感は、2つの相対立する思想——人間の尊厳と人間の無力さ——の間にある。前者の思想は、新たに発見された世界への真の驚きと譁嘆に、後者は、Camões 自身が味わった悲惨、レステロの老人によって予言されたポルトガルの衰退に代表される。人間の宇宙や人類についての知識は人類史上かつてなかったほどに拡大したが、われわれが知れば知るほど、われわれの知らないことは多くなり、世界の複雑さは、人間の能力に平行して増大する。自然の無限さにたいする人間の卑小さ、無力さについての自覚が、世界を知った Camões の別の一面であった。

Os Lusíadas に現われた重要なもうひとつの特徴は、Bacon の科学的実証主義の先駆ともいえる経験主義的精神である。気象学者、水先案内人、造船業者たちは、中世の誤った地理上の概念を正し、新しい科学を打ちたてなければならなかった。書物の中には問題解決の鍵を見出しえなかったもので、それはもっぱら、自らの経験を基にして行われ、Duarte Pacheco Pereira, D. João de Castro, Pedro Nunes, Garcia de Orta らの科学者が出た。Camões は、これらの人々を個人的に知り、あるいはその作品に親しみ、得た知識を、自分の直接の体験と共に Os Lusíadas の中に注いだ。

XVI 世紀ポルトガルの文化的傾向は、前半と後半とは著るしくことなり、後半では、異端審問制度が強化され、イエズス会士が国政に大きな影響力をもちはじめた。Gil Vicente, Bernardim Ribeiro, Sá de Miranda, João de Barros, その他のルネッサンス作家の本が発禁になったり、削除されたりした。さらに、1580 年、スペインに併合されたため、ポルトガルは、文学や芸術の中心となるべき宮廷を失った。ルネッサンス精神は、ポルトガルから急速に姿を消し、宮廷がないため、古典主義へと形を変えて進んでゆくこともなく、以来 XVIII 世紀になるまで、学問、芸術は何ら見るべきものを生まなかった。このような文化の重要な変革の前夜に出版された Os Lusíadas は、ポルトガル人文主義の偉大な最後の代表者であったのである。

3 Luis de Camões の生涯

Luis de Camões の生涯を語ることは非常に難かしいことである。あまりに不明な点が多いためである。今までに多くの伝記の試みがなされ、例えば Camões の伝記として最高のものといわれている Storck による伝記さえもその多くは推定によって書きかえている。Camões の伝記の場合は、現在我々に知られている極く僅かな *documentos* と *documentos* の間を合理的な推理によってどの様に埋めるか、その能力によりその伝記の価値が大きく左右される。Hernâni Cidade は Camões の伝記はせいぜい *uma escassa meia dúzia de páginas* にしかならないと言っている。(註1)

事実 Camões が没して33年後の1613年に出た Pedro de Mariz による最初の伝記の場合ですら、Camões の *sangue nobre* を立証しようと非常な努力を傾けてその家系を述べながら、いつ、どこで、生まれたのか全く触れず空白のまま、突然インド出発について語り始めている。このことはすでに当時 Camões に関する *documentos* が、もしあったにしても、すでに殆んど散逸してしまっていたことを意味している。

Camões の家系については現在かなり確実にわかっている。Camões の祖先は Galiza の貴族で、その Camões 家の Vasco Pires de Camões が1370年に Portugal へ来た。その曾孫が Camões の父親の Simão Vaz de Camões である。尚この Vaz de Camões の母親の Guiomar Vaz da Gama はインド航路を発見した Vazco da Gama を生んだ Gama 家の一人であった。Camões の母親は Ana de Macedo といひ、Camões を生んで程なく没したため、継母の Ana de Sá に育てられた。しかしこの説と違ひ、母親は Ana de Sá de Macedo といひ、彼が息を引取る時にはその枕元で10数年を遠いインドで過ごし、辛い生活を送った息子の死のために涙を流したという説もある。

生れた場所と年についてはこれを示す *documentos* が全くないため種々の仮説が出されている。生れた場所については、ホメロスの場合と同じ様に、ポルトガルの各地があげられているが、現在では Coimbra と Lisboa の二つの説が最も有力であるが、Lisboa で生れたとする説の方が真実に近いようである。生れたのは1524年または、25年とする説と1530年代とする説がある。前者の説をとる人は、Camões は1550年には25才であったと書いてある *documento* (現存せず) によったという Faria e Sousa の説を支持する人達であるが、この点に限らずその他の点においても Faria e Sousa の説は全面的に信頼することが出来ないとする人も少なくないことは知っておく必要がある。1530年代に生れたとする説は、後に触れる1553年の *carta de perdão* の中で、Camões が自分は“*mancebo*”であると言っていると述べられていることを重視し、1553年から逆算して1530年代を主張している。

(註1) Luis de Camões, *Obras Completas*, vol. 1 (1956 Lisboa) P. K.

彼の幼年時代については全く知られていないが、青春時代は Coimbra で過したことは間違いない事実のようである。この時期は後の Camões にとって非常に重要な時期で、特に Os Lusíadas に示されているギリシャ神話を始めとする非常に該博な知識はこの Coimbra 時代に身につけたものであると言われている。その後彼が波瀾に富んだ生涯を送ったことを考えれば、彼の詩作品に見られる知識は全てこの時期に自分のものとしたと考えざるを得ず、そうとすれば彼の記憶力の良さには驚嘆せざるを得ない。ところで彼はその知識を一体どこで身につけたのか。Coimbra 大学（1290年創立）とする説と、父方の叔父の D. Bento の居た Santa Cruz 修道院の学院とする説の二説がある。前者の説を立証せんと現在まで Coimbra 大学のあらゆる記録を調査したが、彼がそこに在籍したことを立証するものはなにも発見されていない。現在では後者の説が有力である。

やがて Camões は何等かの理由で再び Lisboa へ帰る。彼の詩でしばしば詠われる Belisaこそ彼の遠縁の Isabel である（従って Belisa は Isabel の anagrama と考える）と考え、その詩の内容からその理由を Isabel との恋愛問題と推定する説もあるが、詩の世界と現実とは必ずしも重るとは限らないからこの説を直に支持するわけにはいかない。

Lisboa に戻ると Camões は D. Manuel の宮廷に姿を現す。そこで彼は稀に見る才能を示し、宮廷の人々を魅了したことであろうが、また同時に多くの人々は彼に対して激しい嫉妬を感じたことであろう。この頃彼は再び Lisboa を後にする。ここでもその理由は不明であるが、やはり恋愛問題が関係している様である。王女の D. Marna の名まであげてその原因を解明しようとする説もあり、その説によれば、彼は自分の意志で Lisboa を去ったのではなく、追放された。しかしこれもあくまで想像の域を出ていず、この説が重視する、彼の詩の中に出て来る “desterro” の語の意味を字義通りに解釈すべきでないとする説もあり、決定的なことは何も言えない。やがて彼は再び Lisboa に姿を現すが彼を迎える人達の態度に、詩人特有の鋭い感覚で、自分が招かれざる客であることを感じ取ったらしい。彼は Africa へ行った。

ここでも彼の Africa 行の理由として再び「追放」を主張する説のあることを書いておく必要がある。Africa の Ceuta に彼が居たことは殆んど確実であるが、その他のことについては不明である。彼が右眼を失ったのはこの Africa に居る間のことで、おそらくモーロ人と戦った折のことであろう。

ここまでは彼に関する確実な documentos がないため大部分が不明または推定にすぎなかったが、Africa から Lisboa へ戻り、遠い India へ出発するまでの間の Camões に関しては確実な従ってまた実に貴重な documento が発見されている。Carta de Perdão である。それによると彼は 1552年6月16日友人2人が廷臣の Gonçalo Borges と争っているのを見て仲裁(?)に入り彼を傷つけてしまった。そのため Camões は捕えられ投獄された。それから約半年後の 1553年2月に当の Gonçalo Borges 自身が彼を赦すことを表明し、Camões 自身も“自分は貧しい若者 (mancebo)”であり、“1553年に India へ行く”からと言って国王に赦しを請うた。その結果この carta de perdão が出されたのである。一方当時彼が友人に宛てた手紙によると彼はボヘミア的な生活を送っていたようである。

Camões が 1553年に India の Goa に居たことは確実である。また現存はしていないが、Faria e Sousa が発見した（と彼自身は言っている）documento に

よると 1553 年に India へ行った者の名前の中に Camões の名があるという。そこでこの documento と Camões 自身が “India へ行く” と言っている事実から彼は India へ行くことを条件として釈放されたのであって、自分の意志で India へ行ったのではないという説がある。しかし同じ Faria e Sousa によって発見されたもう一つの documento がある (現存はしていない)。それによると 1550 年に、India へ行った者の名前の中にも Camões の名が記録されているという。もしこの二つの documento が本当に存在したとしたら、この事実を一体どの様に解釈したらよいか。1550 年に一度 India へ行き再び Portugal へ戻り、改めて India へ行ったことも考えられるが、この推定をしている人はいない。そこで Camões は 1550 年にはすでに India へ行く決心をしていたが、何等かの理由で出発直前にその決心を変えたのかもしれない。そして 1553 年に釈放された直後にかつての決心を実行すべく、India へ向ったのであろうと推定する説もある。前に述べた様に Faria e Sousa は全面的に信頼することが出来ないので、この二つの documento を無視している説もある。

ともあれ彼は 1553 年に一兵士として Portugal を後にした。この時から 16 年間彼は故国の土を踏むことはない。インドでの生活は決して恵まれたものではなかったらしい。当時の兵役は 3 年間と定っていたので、3 年の間は兵士として戦闘に参加し、Moluca へ、China へ行き、Malaca へも Macau へも行った。3 年の兵役を終えてから彼がどのような生活を送ったか、確実なところはわかっていない。兵役が終ると (終る前という説もある) 不在人と行方不明人の財産管理人に任命されたとする説もある。その説によると後に職務怠慢の故をもって捕えられ投獄された上、Macau から Goa へ送還された。その航海の途中メコン河の河口で船が難破し、彼はすでにほぼ完成していた Os Lusíadas の草稿と共に尽く海底に沈むところであった。再び彼は Goa で捕えられ獄中の人となりそれ以後友人のレドンド侯 D. Francisco Coutinho が Goa に着いた 1562 年まで約 5 年間獄中にあったという。しかし当時一人の兵士にすぎなかった Camões が財産管理人 (一説には管理長であったとも言われている) になることは不可能であるとして上に述べた説は単なる想像の産物にすぎないと否定している説もある。但しメコン河の河口での難破はほぼ確実の様である。

India に居た間の Camões については上述の様に確実なところはわからないが、1567 年、14 年間居た India を後にし故国へ向った。彼が Portugal へ着いたのは 1569 年であるからここに 2 年間の開きがある。そこで重要視されるのが Diogo do Couto (1542 ~ 1616) が残している Década VIII da India である。ここには彼が Camões と Moçambique で会った時の様子が述べられている。この頃彼は貧窮のどん底にあり友人達から食物を貰っていたと言う。また彼はこの Moçambique に居た頃 Os Lusíadas の最後の仕上げをしていたという。この Diogo do Couto の記録から彼は India から先ず Moçambique へ行ったことがわかる。しかし彼がどの様にしてここへ渡ったのかは謎である。種々の説があるがいずれも確かな記録がある訳ではなく全て程度の差こそあれ想像の産物ともいべきものである。

彼が Moçambique から Portugal へ帰ることが出来たのは彼の友人の Diogo do Couto らの尽力による。彼が長い間離れていた故国の土を踏んだのは 1569 年であった。その 3 年後の 1572 年に Os Lusíadas が刊行され、3 年毎に更新される年

金15 ミル・レイスを与えられた。彼が1569年に Portugal へ着いてから没するまでの間に彼に関する記録としては上述の年金授与の記録だけでその他のことは全く不明である。後に述べる様に彼の没年についても長い間正確な年さえわからなかったのである。そこで彼の晩年の10年間の生活についてもいろいろな説が出された。一説では当時の彼は文字通り「赤貧洗うが如し」であり、忠実な下僕が、彼に代り路上でパンを請う程であり、彼が最後の息を引取った時もそのベッドの側に居たのはその忠実な下僕唯一人だけであったという。また当時の15 ミル・レイスは、決して多額なものではなかったが、路上で生活の糧を乞わねばならぬ程ではない筈で、彼が非常に貧しい生活をしていたとすれば、年金の支払いが規則正しく行なわれなかったからであるとする説もある。しかし現在確実に言えることは、他の多くの点と同様この場合も確実なことはなにもわかっていないということだけである。しかし少なくとも、彼がこの世を去る時その側で薄幸な生涯を送った一人のポルトガル人の死に涙していたのは、下僕ではなくて母親であったという方が真実に近いということだけは言えると思う。というのは彼の死後年金は母親の Ana de Sá に与えられたからである。つまり Camões が没した時には彼の母親は未だ生きていたからである。

彼が没した年については長い間1579年説が信じられていた。というのは Camões の亡骸は、当時流行っていたベストの犠牲者（彼もその一人であったかもしれない）と共に葬られたが、その後 Santa Ana 教会の中央に移され、その墓碑銘には Principe dos poetas de seu tempo の Camões は1579年に没したとあったという説が有力であったからである。しかしこの墓碑銘があったという記録には信頼性が乏しく、次に述べる確実な記録から現在ではこの説を支持する人は少ない。尙 Santa Ana 教会は1755年の Lisboa の大地震で崩れ去り、現在ではその墓碑銘の確認は不可能である。

確実な記録というのは Camões の年金を母親に支払う様に指示したもので、「1580年1月1日より彼（Camões）の没した同年6月10日までの、彼に支払うべき」6765レイスを母親 Ana de Sá に支払うことである。従って彼が没したのは1579年ではなく1580年6月10日であることが一般に支持されている。

かつて Cervantes が Tesouro do Luso と言ったと言われている Os Lusíadas を残したこの詩人の生涯は、冒頭で述べた様に、不明な部分が多に多い。しかし、もし彼の生涯を完全に知ることの出来る程充分な記録と共に、かつて India に居る時に Os Lusíadas と呼ばれる叙事詩を書いたという記録だけが残り、Os Lusíadas そのものが残っていなかったとしたら、一体その記録にどれだけの価値があるろう。こう考えれば Camões に関する記録の少なさを歎くより、我々には8816行にも及ぶ一大叙事詩が残されていることをこそ喜ぶべきであろう。

最後に、Camões に関連してここには是非書いて置かねばならぬことがある。日本で Camões, Os Lusíadas の名が初めて知られたのは何時のことであるかわからないが、少なくともまとまった形で紹介されたのは新村出博士が明治43年6月に執筆された同年夏の「芸文」に発表された「南風（極東流風の詩人カモエンスを憶ふ）」と題する一篇であろう。これは Camões とその Os Lusíadas を紹介したもので、その深さと文章の格調の高さにおいて、この一篇を越えるものは現在まで出ていない。僅かに文学辞典、人名辞典に簡単に叙述されているにすぎない。この明治43年(?)に執筆された「南風」

は、主として西学東漸の沿革を叙述し、或はその資料を供給せる 10 数篇を骨子とし、「足利時代の南国交通および倭寇の史蹟と近代琉球の文献とに関する蕪文数篇」(初版序)と共に一本にまとめられ「南蛮記」として大正 4 年 7 月(昭和 18 年 4 月再版)に刊行された。この中には「テオフィロ・ブラガと葡萄牙文学」(明治 43 年 11 月執筆)と題する一篇も収められている。これはテオフィロ・ブラガ(Teofilo Braga 1843 ~ 1924)を紹介しながら同時に当時のポルトガルの詩壇をも紹介したもので、この一篇こそ日本に初めてポルトガルの文学——たとえそれが一部分であるにせよ——を紹介したのではないかと思う。博士の博識はすでに周知の事実ではあるが、改めて驚嘆の念を禁じ得ない。

4 Os Lusíadas のテキストについて

Os Lusíadas の初版本は 1572 年に刊行された。しかしこの初版本には誤りが多いため、^(註 1) その後この初版本が本当に初版本であるのかという非常に重要な問題を生む原因となった。勿論 Camões 自身の Manuscrito が現存すれば、少なくとも印刷上のミスは解決する上に、初版本決定にも大いに貢献するのであるが、それは残っていない。1616 年に Os Lusíadas の最初の注釈本を書いた Manuel Correia は、その中で Camões の manuscrito のことに触れながらすで行方不明となっていると言っている。^(註 2) また José Maria Rodrigues も Os Lusíadas のいくつかの manuscritos について論じているが、何れも初版本刊行後に作られたものであって信頼に値しないと述べている。^(註 3) 従って私達の Os Lusíadas の研究は全て 1572 年刊行の初版本を出発点としなければならない。

ところで奇妙なことに刊行年を 1572 年とする版が二種類ある。しかし Os Lusíadas

(註 1) Epifânio Dias ; Os Lusíadas Comentado (Tomol, 1916 Tomo 2 1918 Lisboa) pp. XIII ~ XXIV — 本書は Os Lusíadas の注釈本として最高のものと言われている — で Epifânio Dias はその誤りを数多く指摘している。

例えば、

- 1) Tipógrafo による誤り。Canto II-54-6 Longico これは当時の pronúncia popular であり、そのために Longinco とならなかった。cf. Costantino, Constantino.)
- 2) Camões 自身の誤り。VII-77 venerando, と mauritano, X-88 turbulento と horrendo. これらは互に韻を踏んでいない。

(註 2) Hernani Cidade; Luis de Camões, Obras Completas. vol. IV. Os Lusíadas (1) (1956 Lisboa) p.V

刊行後約 100 年の間はこれに気付いた人は誰もなく、1685 年刊行の *Faria e Sousa* (1590 ~ 1649) の彼自身の手になる *Camões* の二番目の伝記において初めてこの二種類の版の存在が指摘された。それ以後現在までこの二つの版をめぐって多くの論争がなされて来た。今その論点を整理すると次の三項に要約される。

- 1) この二種類の版は果して独立した二つの版か。
- 2) 二つの独立した版とすれば、初版本はそのうちのどちらか。
- 3) 他の版は一体いつ、何の目的で刊行されたものか。

1) この問題については現在では全く異論はなく一致して、この二種類の版は独立したものであると認められている。その根拠は今まで数多くの専門家により示されて来ているが、主なものを挙げると次の通りである。

イ) 扉の図柄について。

中央上部の 1 羽のペリカンの首の方向が一方は向って左へ向き、他方は右へ向いている。また両側に描かれている柱の様子が逆になっている。大きな相違はこの二つであるが、細部を綿密に比較すれば数多くの相違を指摘することができる。

ロ) *Lição* について。

Canto I の最初のスタンザにおいてすでに両者の間には相違点がある。7 行目の verso が、左向きのペリカンの版では *E entre gente remota ...* となっているのに対し右向きのペリカンの版では *Entre gente remota ...* となっている。また前者では *edificarão, sublimarão* となっているのに対して、後者では夫々 *edificaram, soblimaram* となっている。他に *Canto I* だけでも前者の *A vena* (5-2), *De Luso* (24-4), *Tornarão* (29-8), *Rata* (29-8), *Queres* (38-5) が後者では夫々 *Auena*, *Do Luso*, *Começaram*, *rota*, *queiras* となっている。

ここにあげたものは両者の相違点のほんの一部ではあるが、両者が同じ刊行年を示しながら全く独立した二つの版であることを充分納得させてくれる。尙 *Epifânio Dias* は左向きのペリカンの版を A, 右向きのペリカンの版を B と呼び、*José Maria Rodriguês* は前者を Ee, 後者を E (*E entre gente ...* と *Entre gente ...* の相違による) と名付けており、現在では一般に *José M. Rodriguês* の名称が行なわれている。(註 4)

(註 3) 初版本の *edição facsimilada* (Lisboa, 1921) pp. XXVII ~ XXXII.

- 1) *Biblioteca Nacional* にある *Canto I* だけの *manuscrito*。最後に “*não continuo porq̃ sahio a lus.*” とある。
- 2) *Faria e Sousa* が *Madrid* で発見した *Canto VI* までの *manuscrito*。
- 3) *Faria e Sousa* が *Madrid* で発見した *manuscrito*。

Epifânio Dias は全て初版本の刊行後に作られたもので 1) は *uma audaciosa e mal alinhavada falsificação de Ee*, 2) は *uma fraudulenta lucubração* であると言ひ、3) は *falsificar* されたものであると言っている。

(註 4) この両者の相違は *José Maria Rodriguês* ; *Op. cit.* pp. I ~ K
Epifânio Dias ; *Op. cit.* pp. XXVI ~ XXVII に詳しい。

2) この問題については 1) の場合と異なり現在まで数多くの仮説が出されたが大別すると次の二つになる。

イ) Faria e Sousa (註5)

彼は Ee と E とを比較し、Eには Ee より重大な誤謬があることを理由としてEが初版で Ee はそれに続くものとした。彼によれば初版が予想外に売れたため、急ぎ再版の必要が生じ、そのため、まだ多くの誤りを残しながらも、一応Eの改訂版として 1572年に刊行したのが Ee であった。

ロ) Epifânio Dias (1841~1916) (註6)

彼は Faria e Sousa とは逆に Ee が初版本であると主張する。彼は多くの理由を挙げてこのことを論証しているが、その中で最も重視しているのは 8-32-3 が Ee (彼自身はこの版を A と呼び、他を B と呼んでいることは前述の通り) では *Português Scipião chamar-Se ...* となっているが E では *Português Capítam chamar-se ...* となっている事実である。彼は言う。もし初版を E とすると Ee は *Português Capítam* を *Português Scipião* と読違えたことになる。ところで一般に自分のよく知らない語を目にした時、耳にした場合、自分のよく知った語と取換えることは充分あり得ることであるがその逆はあり得ない。この場合に戻れば *Capítam* はありふれた語であるのに反して *Scipião* は極めて特殊な語である。従って E が初版本であることは “*moralmente impossivel*” であると結論する。また彼は次の点も強調する。

Aljobarrota と Valverde の戦の英雄の名を問われた Vasco da Gama が答えたのが今問題となっている verso であるが、名前を問われた時に “*caracteristico*” でない “*um nome apelativo*” で答えるより固有名詞の *Português Scipião* と答えるのが当然である。歴史的に見ても *Publio Corneuo Scipião* はローマのためにカルタゴと戦い、*Nuno Alvares Pereira* (前記の戦の英雄) はスペインと戦い、共に祖国を救った。その意味で *Nuno Alvares Pereira* を *Scipião Português* (ポルトガルのスキピオ) と呼ぶのは当然である。

José Maria Rodriguês も詳細に Ee と E を比較し Ee が初版であると結論づけている。(註7) 彼が論証として挙げているものはテキストそのものに関するものでも非常に多いが、Ee と E に用いられている活字の比較から次の様な興味深いことを言っている。

i) Eに用いられている活字は、一部を除いて、Eeに用いたものと同一であり、

ii) その活字はEの方がEeより損傷が深い。

両者の間で活字が異なるのはEの *privilegio* に用いられている飾り文字の E と

(註5) *Hernâni Cidade* ; Op. cit. p.X *Francisco Silveira Bueno* ; *Os Lusíadas comentado* (São Paulo; 1960) p. 47.

(註6) Op. cit. pp. XXVI ~ XXVII .

(註7) Op. cit. pp. I ~ K.

Canto II と VII の飾り文字の I だけでこれらは E に再び用いるにはあまりに損傷が酷すぎたためであると言っている。

上に挙げたのは Epifânio Dias と José Maria Rodriguês の二人の論証の、しかもその一部分であるが、当初支持されていた Faria e Sousa の仮説は完全に否定され、現在では Ee が初版本であることが認められている。

3) この問題は 2) の問題より更に複雑なため 2) の場合より多くの仮説が出されているが、それらを大別すると次の三つになる。

1) 前述の様に Faria e Sousa は E と Ee は共に 1572 年に刊行されたものとしている。Faria e Sousa は E を初版本として上述の様に主張しているのであるが、Ee を初版本と認め、E もこの 1572 年に刊行されたと主張する人はない。

尙、Alexandre Albuquerque の仮説 (註 8) に従えば、E は 1576 年に刊行された。この年は Ee を印刷した Ant6nio Gonçalves が、その印刷業を止めた年である。彼が印刷業を始めたのは利益をあげることが目的としていたため、E も Ee の改訂版として刊行したのではない。従って E に誤りが沢山あるのも当然である。そして E の刊行によって一応利益をあげることが出来たので E の刊行を最後として印刷業を止めたのであると彼は言う。彼も Faria e Sousa と同様 Ee の予想外の売行きを推定した上で上述の仮定を出したのである。Hernâni Cidade によれば Os Lusíadas が刊行されたということは当時 Cam6es がすでに有名になっていたことを意味しているから、Os Lusíadas の好評は認められなくはないし、従ってまた Faria e Sousa, Alexandre Albuquerque の主張する何れの刊行年も認められなくはないと言っている。(註 9)

2) Tito de Norouha の仮説 (註 10)

彼は後に述べる Edic6o dos Piscos (1584 年刊行、以下 Ep とする) の後に刊行されたと推定しており、この仮説を支持する人が多い。Ep は Censor の手で訂正と削除が大幅に行なわれた版で、そのために E は Os Lusíadas を再び初版本と同じ形で刊行する目的で刊行された版であると主張する。但し Ep が censor の手で訂正に止まらず大幅に削除されたため、Ee と同じ様に完全な形で新しく刊行することの困難を考え、Ee と同じ形で刊行することにより厳しい censura の目を逃れようとしたと考える。この推定に従えば E の刊行年を実際とは違う 1572 年としたことは説明出来るが、Ee と E の間にある数多くの異同を説明することは困難になる。

(註 8) Hernâni Cidade ; Op. cit. pp. XV ~ XV.

(註 9) Op. cit. pp. XV ~ XV. しかし Francisco Silveira Bueno は、当時のポルトガルの状況は、ペスト、戦争、迫り来るスペインの支配に対する恐れなどのために文学にとっては決して有利な状況ではなく、従って同じ年(1572年)に直に新しい版を作る理由はないと言っている。Op. cit. pp. 54.

(註 10) Hernâni Cidade ; Op. cit. p. XV. F. Silveira Bueno ; Op. cit. pp. 55 ~ 56

ハ) José Maria Rodrigues の仮説 (註11)

彼は Ee と E が同年 (1572年) に刊行されたという可能性を認めながらも、両者の間の異同が説明できない、というのは同じ年に同じ tipografo が初版とこの様に違い版を作る筈がないからであると言って同年説を否定している。

また E が Ep の後で刊行されたとする仮説に対しては次の様に言ってこれを否定している。即ち、Ee には無いが、E と Ep には共通な語 (例えば Ee では 1-29-8 の最初が Tornarão になっているのに対して E と Ep は共に Começaram となっている) があり (と言っても彼は 12 しかあげていない)、この事実は E が Ep より先に刊行されたことを意味している。何故ならば “完全な形” で Os Lusíadas を刊行するのに Ee がありながら “不完全な形” の Ep をモデルにする筈がないからである。しかし彼のこの理由には、E も Ep も Ee をモデルにして作られたもので彼の指摘した 12 の共通点は偶然に生じることもあり得るといふ Hernâni Cidade の反論も成立し得る。(註12) しかし José Maria Rodrigues はこの 12 の共通点は “meras coincidências” であると説明することは出来ないと言っている。

いずれにしても José Maria Rodrigues は上の二つの仮説を否定した上で E は Ep の前に刊行されたと推定する。誰かが Ee を刊行した Antônio Gonçalves から Ee の印刷に使った活字を買い取り、Camões 自身が改訂した、従ってまた Ee より優れた版であると思わせるために E を刊行したもので、だからこそまた両者の間には多くの相違があるのは当然であるとしている。従って扉が Ee と違うのもその “誰か” が “故意に” 新しいものを使ったからである。また彼によればこの E が刊行されたのは Ee の privilégio (註13) の終わった 1582年から Ep の刊行された 1584年の間であった。1582年以前に刊行されたと考えないのは、もしこの privilégio を持っている人がこれを刊行したとすれば 1572年とする必要がないからである。つまり彼は E は Ep の前に刊行された fraude comercial であったと推定している。尚 Ee の印刷に用いられた活字を買った “誰か” とは 1584年から 1586年の間にリスボンで印刷業を始めたスペイン人の Andres Lobato ではないかと考えている。1586年に彼の刊行した Gil Vicente 全集の第2版に E の扉の図柄と同じものが用いられているからである。

以上初版本に関する代表的な仮説をいくつかあげたが、Hernani Cidade の言う様に、この多くの仮説の中から真実をつかみ取ることは容易ではない。将来従来の仮説と異なる新しい考え方が現われ、この初版本をめぐる謎を解きあかしてくれるかもしれない。(註14)

(註11) Op. cit. pp. X-XV

(註12) Op. cit. p. XVI

(註13) Ee に附されている Alvará Régia で Os Lusíadas の印刷の終る日から 10 年間ポルトガル並びにポルトガル領においては Luis de Camões あるいは彼に代る人の許可なくしてはいかなる人も印刷、販売をしてはならないという privilégio が Camões に与えられている。

(註14) Op. cit. p. XVII.

最後に前に触れた *Edição dos Piscosi* (註15) について簡単に述べる。

この版は Estêvão Lodes が 1584 年に刊行したもので、前述の様に、宗教的・政治的・道徳的理由から censor によって大幅に訂正削除が行なわれた版である。かつて初版本の censor として *Os Lusíadas* が *O Livro digno de se imprimir ...* であると認め、ギリシャ神話の神々 (*Deuses do Gentio*) はあくまで詩的効果を目的としたものであって *ficando sempre salva a verdade da nossa santa fé* とその censura の意見書で語った Fr. Bartolomeu Ferreira もこの版の 4 人の censor の一人であった。削除されたスタンザの数は 23 に及び、ギリシャ神話の神々は *deus, deuses* から *os de cima, os idolos, os senhores* と変更されており、censor の意見書には *Assim emendado como agora vai, não tem cousa contra a fé e os bons costumes* とある。(註16) 12年前に出た初版本とこの Ep の間のこの大きな相違、つまり censura の基準の大きな転換の理由は一体何か。単に Fr. Bartolomeu Ferreira の他に 3 人の censor がいたということだけであろうか。確定的なことはまだ何もわかっていない。これもまた *Os Lusíadas* のテキストをめぐる謎の一つであろう。

小林 英夫 早稲田大学教授
池上 峯人 東京外国語大学講師
松尾希世子 東京外国語大学助手

(註15) この版には何人かによる註が加えられている。その中の 3-65-2 の *A piscosa Sezimbra* の註として “*Sezimbra* が *piscosa* なのは (1年の) ある時期にそこへ非常に沢山の *piscos* が集って *Africa* へ渡るからである” と書かれている。ところがこれは註を加えた人が *piscoso* の正しい意味を知らなかったための滑稽な誤り (*piscoso* は「魚の多い」の意、*pisco* は「ある種の鳥」の意) で、この誤りの故にこの版が一般に *Edição dos Piscos* と呼ばれるに至った。

(註16) *Hernâni Cidade* ; *Op. cit.* pp. XVIII ~ XXII.